

# 非日常空間における交通手段の評価

梶田祥之介\*・田中一成\*\*

## Evaluation of transportation in extraordinary spaces

Shonosuke Kajita\*, Kazunari Tanaka\*\*

Currently, most travel satisfaction is based on satisfaction with the destination (spot evaluation), which accounts for the majority of the ratings. Satisfaction with transportation access and local transportation is an important part of travel, and is thought to have a significant impact on travel satisfaction. In this study, we focus on transportation, which occupies an important position in travel, to evaluate satisfaction. In this study, we first conducted analysis of the extraordinary in order to understand the boundary between the ordinary and the extraordinary. In the analysis, we conducted a questionnaire survey on the frequency of visits to tourist attractions in the Kinki region, and visualized the relationship between the ordinary and the extraordinary spheres by displaying the results on a GIS.

**Keywords** 旅行 (travel), 満足度 (satisfaction), 交通 (transportation)

### 1. はじめに

旅行は「非日常」という言葉と強い関係がある。既往研究だけでなく旅行会社のCMやポスターにも非日常の言葉が多々利用されている。「非日常空間」とは日常からかけ離れた空間を指し、生活の場から離れて行動する旅行と関係性が高いと考えられる。そうしたことから非日常空間は現在の生活の場から遠く離れた場所にある、非現実的な場所としてとらえられる。しかし、コロナ禍となり旅行制限や県境をまたいでの移動の規制がされたことから、居住地区に近い場所での旅行が注目されている。そのような環境下において非日常空間はどのように考えられているのであろう。

本研究では、まず「非日常空間」とはどのような条件において存在するのであるかに着目した。代表的な非日常空間のひとつとしてよく挙げられるディズニーランドについてその非日常性を調べた研究では、ディズニーランドは現実世界との遮断や映画の三次元再現など空間から日常性を取り除く手法が用いられていることが分かる(田所 2012)。このように非日常とは日常と異なる環境のことを示すことが多く、その場の特質が大きく関係していると考えら

れる。しかしその場以外にもアプローチの部分などで非日常性を生み出す方法は存在するのではないだろうか。例えば785段もの長い階段を登った先に本宮を置く金刀比羅宮について、麓の街との空間の分離、非日常性を感じる人は多い。ここにおける非日常性は神社という歴史的場所が持つ特質も関係するが、この階段によって強まっている可能性が大いに考えられる(和泉 2009)。

旅行という非日常的イベントが変化していく中で、場の特質による非日常性の創出だけでなく、場までの行程など場とは異なる部分での非日常性の創出手法が必要となってくるのではないだろうか。

### 2. 研究目的

金刀比羅宮のように、非日常性とは場特有の性質だけでなくそこまでの行程も関係してくると考えられる。このように空間だけでなくアクセス部分を考慮して観光地評価を試みた研究では、観光地の魅力を「観光スポットの魅力(スポット評価)+交通アクセス+費用」とし、温泉地を対象に交通アクセスと費用を加えた観光地の魅力を分析している。結果として「スポット評価値」が高くても「スポット評価

---

\* 学生会員 大阪工業大学 工学研究科 建築都市デザイン専攻 (Osaka Institute of Technology)  
〒535-8585 大阪府大阪市旭区大宮 5 丁目 16-1 E-mail : [m1m22105@oit.ac.jp](mailto:m1m22105@oit.ac.jp)

\*\* 正会員 大阪工業大学 工学部 (Osaka Institute of Technology)

に交通アクセスの影響を考慮した評価値」は、来訪者の居住地からの距離に従って低減することを示している。このことから観光地を考える際、そのスポットの特質だけでなく距離や費用などアクセス面も重要であることが分かる。そしてこれは、アクセス面における非日常性は距離や費用と関係する可能性を示唆している。本研究では観光アクセス面における非日常性の定性化を目的とする。

### 3. 研究方法

本研究では、居住地から対象地（観光地）が近く費用がかからない場合には非日常性を感じにくく、反対に対象地が遠く費用がかかる場合には非日常性を感じるのではないかと仮定し、非日常性を頻度と結び付けながら研究をおこなった。非日常と頻度について、ある観光地について訪れる頻度が高くなるほど、その観光地への期待感や探求心は減少し、反対に生活感や安心感が高まると考えられる。言い換えるとこれは観光地の「日常化」であり、このことから訪問頻度が低いほど非日常性が高いと考えられる。

よく訪れる観光地と居住地区からそこまで距離との関係を知るため、まず居住する地域に存在する観光地に訪れる頻度をアンケートにより調査した。この調査では近畿圏を対象とし、近畿圏に居住する人々に近畿圏にある観光地への訪問頻度を尋ねた。次にこれらの観光地への観光頻度について、訪れる頻度が高い観光地と訪れる頻度が低い観光地を居住地区ごとに調べ、それらの関係性を可視化するために GIS 上に示した。

#### 2.1. アンケート

アンケートでは近畿圏を対象に、観光頻度を訪ねた。本研究では近畿圏を日本関税協会が示す 2 府 4 県（大阪、京都、滋賀、和歌山、奈良、兵庫）とし、観光地は日本交通公社の観光資源台帳に記載されている観光地から 125 カ所を選出した（表 1）。これらの位置を記した図が図 1 である。そしてこれらの観光地について、近畿圏に暮らす 85 人に対して訪問頻度を表 2 に記載してある 10 段階の問いにより尋ねた。

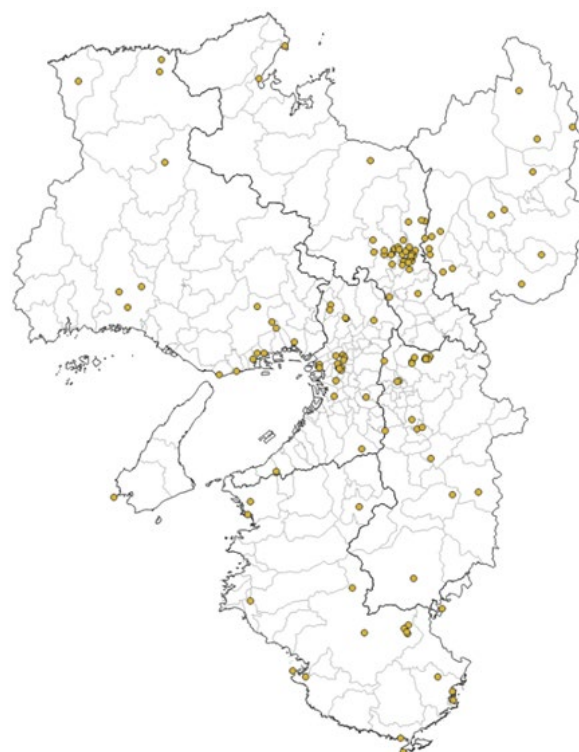


図 1 観光地の位置

表 2 質問項目（観光頻度と属性）

観光頻度	週 1 回以上
	月 2 回以上（2 週間に 1 回以上）
	月 1 回以上
	3 ヶ月に 1 回程度（年 4 回程度）
	半年に 1 回程度（年 2 回程度）
	1 年に 1 回程度
	2 年に 1 回程度
	3~5 年に 1 回程度
	今まで 1 回
	行ったことがない
属性	性別、年齢、職業、現在の居住地、居住年数、現在の場所よりも長く住んでいる場所、観光人数、旅行頻度

対象観光地	大阪府	箕面の滝、葛城高原、生駒山、大阪城、難波宮跡、仁徳天皇陵、応神天皇陵、四天王寺、住吉大社、今宮戎神社、通天閣、天保山、造幣博物館、USJ、ひらかたパーク、太陽の塔、道頓堀、国立民俗博物館、国立国際美術館、あべのハルカス、天見温泉、箕面温泉、山中溪温泉
	京都府	天橋立、保津峡、嵐山、愛宕山、金閣寺、銀閣寺、下賀茂神社、上賀茂神社、三千院、八坂神社、桂離宮、教王護国寺、広隆寺、北野天満宮、京都御所、寂光院、鞍馬寺、平安神宮、南禅寺、二条城、清水寺、知恩院、三十三間堂、仁和寺、大覚寺、伏見稲荷大社、平等院鳳凰堂、石清水八幡宮、龍安寺、真宗本廟、本願寺、京都国立美術館、伊根の舟屋群、美山町北山村集落、東映太秦映画村
	兵庫県	六甲山、玄武洞、須磨浦、鳴門の渦潮、竹田城、姫路城、西宮神社、五色塚古墳、北野異人館、湊川神社、円教寺、兵庫県立近代美術館、日本玩具博物館、神戸市立フルーツフラワーパーク、有馬温泉、城崎温泉、湯村温泉
	奈良県	大和三山、若草山、吉野山、大峰山、興福寺、東大寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺、春日大社、平城京跡、藤ノ木古墳、高松塚古墳、石舞台古墳、奈良国立博物館、十津川温泉、入之波温泉
	和歌山県	潮岬、瀨峡、高野山、和歌の浦、熊野古道、那智の滝、熊野本宮大社、道成寺、和歌山城、くじらの博物館、串本海中公園センター、南方熊楠記念館、竜神温泉、白浜温泉、勝浦温泉、川湯温泉、湯の峰温泉、渡瀬温泉
	滋賀県	余呉湖、伊吹山、比叡山、彦根城、安土城、石山寺、三井寺、日吉大社、近江神宮時計博物館、滋賀県立美術館、黒壁スクエア、近江八幡土蔵洋館群、甲賀の里忍術村、滋賀農業公園ブルーメの丘、雄琴温泉

表1 アンケートで用いた観光地

アンケートは居住地ごとにより分類し分析を行った。分析方法として、まず頻度を数値に変換した。変換の際、9を「週1回以上」として0～9の数値に変換した。次にこれらの値について、個々人の旅行頻度に影響されないようにするため、各個人について相対的な頻度を表せるパーセント表示に変換した。その割合を観光地ごとに累計することで、訪れる頻度の高い観光地を抽出した。大阪市民の結果が図2のようになった。この図では125カ所の観光地の中で特に平均頻度の高い11カ所について示している。

この結果について可視化するために、QGIS上に表記し居住地と高頻度で訪れる観光地との地理的関係を調べた。

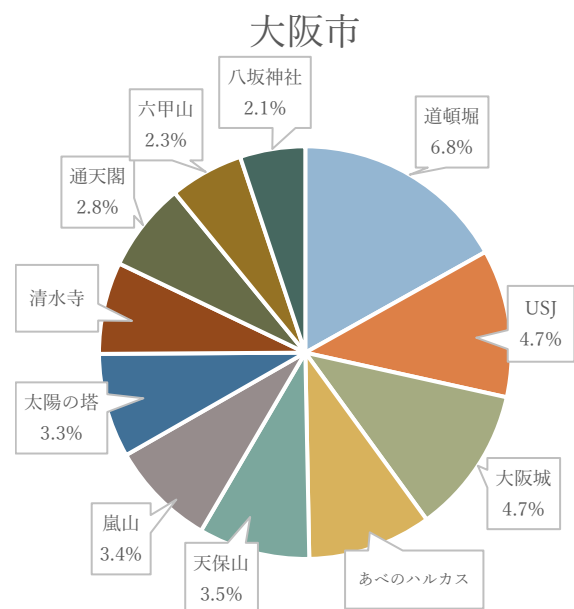


図2 大阪市民のアンケート結果

## 2.2. 観光頻度による非日常性

GIS にデータを書き出す際、それぞれの観光地について平均化した割合の中で2%以上のものを「高頻度観光地」、2%未満 1%以上のものを「低頻度観光地」、1%未満のものを「未訪問観光地」とした。これらの観光地のうち高頻度観光地と低頻度観光地について、居住地区と共に GIS 上に示した。図中ポリゴン色はそれぞれ黄色、青色、灰色である。また各観光地におけるそれぞれの観光地数について表 3 にまとめた。

対象地区について、今回はアンケートを集めた中で回答者の割合が比較的高かった大阪市、兵庫県阪神地区、兵庫県播磨地区の3つの地区を対象とした。それぞれの有効回答人数は23人、18人、15人である。

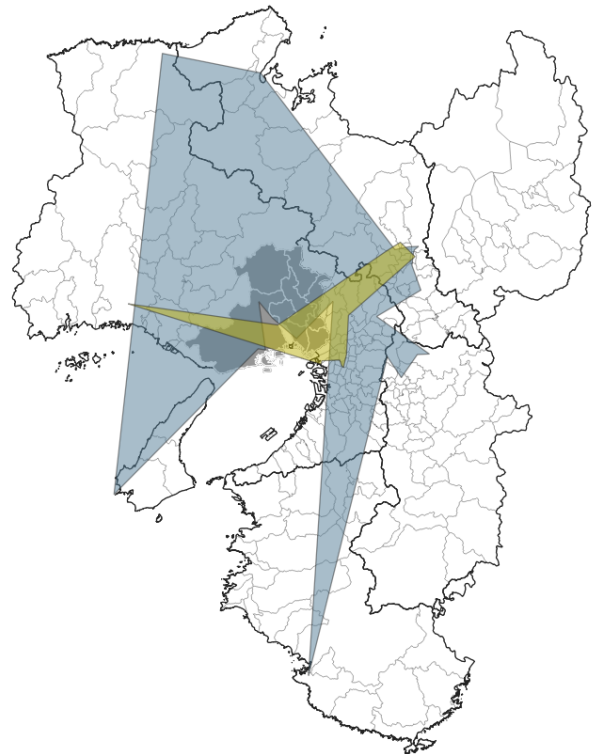


図4 兵庫県阪神地区 観光頻度

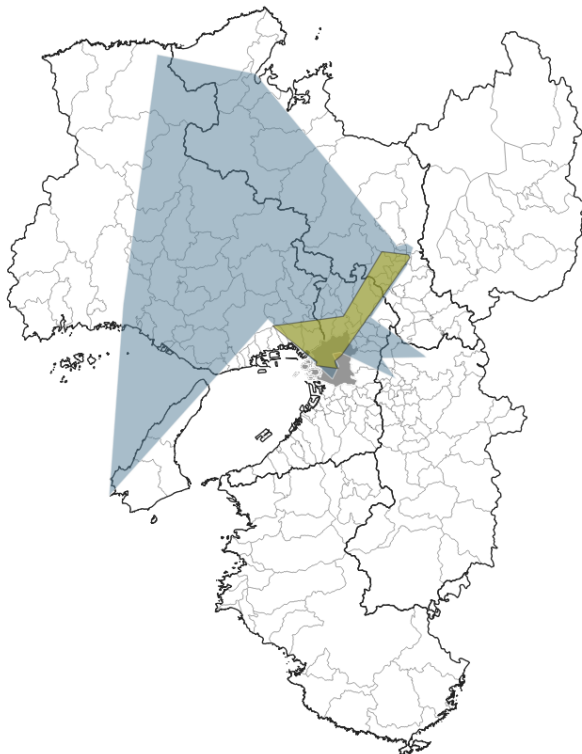


図3 大阪市 観光頻度

表3 各地区における観光地数

	高頻度観光地	低頻度観光地	計
大阪市	11 個	19 個	30 個
阪神地区	12 個	22 個	34 個
播磨地区	9 個	25 個	34 個

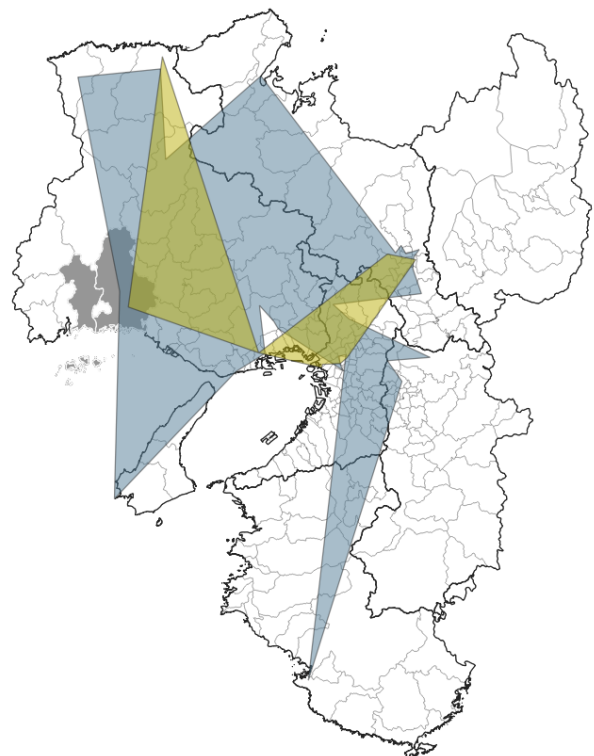


図5 兵庫県播磨地区 観光頻度

これらのデータより、居住地区に近い観光地は高頻度観光地になることと、低頻度観光地は高頻度観光地を含むように存在することの2点が読み取れる。このことから居住地区に近い場所は日常的な場所が多く、反対に遠い場所は非日常的であると言える。大阪市は特に顕著であり、大阪市内の観光地や阪神地区、京都市内などが高頻度観光地となり、それを囲うように低頻度観光地が京阪神近辺に存在している。また大阪市と阪神地区の観光地の配置は似ている部分が多いことから、都市圏中央部での旅行活動の範囲は似た場所になると予想できる。他にも、3地区の中で播磨地区が最も高頻度観光地が少なく、最も低頻度観光地が多いこと、そして公共交通機関や幹線道路の量が他の2地区に比べて少ないことから、地方都市では日常的に訪れる観光地が少なく他地区の観光地に興味を持ちやすい可能性が考えられる。つまり地方に住む人には都心部に非日常を求める傾向にあると言える。反対に大阪市のように日常的に観光地に訪れることができる場所に住んでいる人は、遠くの非日常を求めない可能性も考えられる。しかし本研究ではこのような地方地区を1地区しか扱えなかったこと、播磨地区の観光地が他の2地区よりも格段に少なかったこと、また近畿圏以外の観光地を含んでいないことから、今後他の地方都市で調査をおこない確かめていく必要がある。また、大阪市のデータにおいて大阪府の南側には訪問頻度の高い観光地が存在しなかった。このような結果になった

要因としてその地区に存在する観光スポット評価の低さが関係する可能性もあるが、要因の1つとして使用した大阪市在住者データが大阪市の北部に多いことが考えられる。そのため今後大阪市内でも区分けを行いデータの差異を調べていく。

#### 4. おわりに

本研究では非日常を観光アクセス面において定性化することを目的とし、非日常性を観光頻度の低さと置き換え、観光頻度と居住地区との距離を調べた。

アンケートにより得られたデータをGISに移し可視化すると、居住地区に近い空間では日常的行動が多く存在し、遠い空間では非日常的空間が存在していることが読み取ることができた。さらにこの結果より、都市部と地方部での日常・非日常の考え方の違いが存在すると考察できた。今後この考察をさらに深く調べていくことにより、非日常性の定性化をおこなっていく。

#### 参考文献

- 田所瑛梨 (2012) ディズニーランドにおける非日常性の変容. コンテンツツーリズム論叢, 1, 66-84
- 和泉雅人 (2009) Scalalogie (階段学) へのオマージュ. 慶応義塾大学日吉紀要, ドイツ語学・文学, 45, 19-48
- 鎌田裕美 (2006) 交通アクセスを考慮した観光地の魅力度評価. 日本交通学会第 65 回